

Title	米価調節審査会の設置に就て（上）
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1915
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.9, No.7 (1915. 7) ,p.814(120)- 830(136)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19150701-0120

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

米價調節審査會の設置に就て(上)

高城仙次郎

目 次

一 緒 言

二 問題の性質

三 米價は任意に調節し得るや

一 緒 言

今春政府の試みし米價調節は美事失敗に歸し加ふるに臨時議會も切迫せしを以て、政府は一時其調節を打切りたるも、今回米價の激變を防ぐの最良策を組織的に講究審査せしむるの目的を以て、米價調節審査會なるものを設くるに決したりと。其調査會の委員は大藏、農商務兩省の官吏、貴衆兩院議員、農科大學教授、學識あり又米穀の取引に就き智識經驗を有する實業家より之を選任し、農商務大臣之が會頭たる可しと。

本論起草の時迄は吾人は此等委員任命の發表に接せざりしを以て、本會の權威に就きて何等の評言を加ふる能はざるなり。されど、現内閣の下にある農商務及び大藏兩省官吏中より任命せらるゝ委員は從來の行懸上或は米價の人爲的調節を主張するならんか。又貴衆兩院議員中より選任せらるゝ委員中少くとも政府與黨に屬する者は此主張に賛成するならんと思はる。次に農科大學教授中に於て委員を囑托するとせば、横井時敬博士は其一人なる可く、而して同博士が熱心なる調節論者なるは人の普ねく知る所なり。されば實業家の委員に就きては吾人は何等憶測を逞するの根據を有せざれども、近々設置する可き調査會の多數意見に就きて豫測すること必ずしも不可能に非ざる可しと思はる。

加之、此調査會に對する外部の壓迫が到底教育調査會に對する外部の運動等と同日に語る可からざるを記憶せざる可からず。教育調査會の

最近に於ける審査事項たる大學校令案並に學位令案の如きは其の利害關係の範圍頗る狭小なるのみならず、直接兩案の影響を蒙むるは二三私立大學の經營者並に教授等にして、多く自己の利害問題に就きて露骨の運動に熱中するを潔とせざる人士なり。然るに之に反して、米價の騰落は直接間接國民全體が金錢上の利害に關係を有する重要問題たると同時に、國民の過半数に上る農家及び一部米商店の死活問題とも云ふ可く、且つ夫れ以外に政黨は此問題を黨勢擴張の爲めに利用せんとすやも測り難ければ、米價調節調査會に對する外部の運動壓迫が如何に熾烈なる可きかは今より逆睹するに難からざるの概あり。

勿論、此調査會の目的は調査方法を審議討究するに在りて調節其物を主管するに存せず。従つて該會の決議事項は必ずしも直ちに政策として實行せらる可き性質を有せざるものなりと雖

も、既に米價調節調査會を設くる以上政府は米價調査の必要を認めたるものなりと看做さざる可からず。従つて該會の決議は假令多少の變更を加へらるゝとも、早晚實行せらるゝの運命を有するものなりと云はざる可からず。若し果して然らば、吾人は上文に於て豫想せしが如き性質を備ふる調査會に調節方法の審査を一任することを得ず。吾人は宜しく會の審議と獨立して調節其物の能否、可否、及び調査方法に就きて討究を試み、該問題に關する輿論を喚起し以て調査會の參考に資すると同時に利害關係者の運動を牽制せざる可からずと信ず。是れ即ち余が此問題に關しては殆んど門外漢なるにも不拘、聊か左に愚見を開陳し輿論喚起に對して微力を致さんと欲する所以なり。

二 問題の性質

一 余は以下本論に入る劈頭に於て問題の性質を闡明せんと欲す。如何となれば、晩近此間

題に對して學者操觚者、實業家并に政事家の論議する所を觀るに、殆んど皆米價調節を以て單純なる問題なりと思惟せるが如くなれども、米價調節は若かく簡單なるものに非ざるを以てなり。論者は米穀一石の市價を常に十五圓又は十六圓に維持することを以て米價の調節なりと思へるが如し。本年の臨時議會に於て、大藏大臣の辯明せし政府調節の方針も亦是れに外ならざるなり。されど、米價を常に十五圓に維持することは必ずしも、米價調節の眞の目的を達するの所以に非ざることを記憶せざる可からず。如何となれば、貨幣の購買力は米價騰落の如何に拘はらず多少常に變動しつゝあるを以て也。勿論我國に於ける貨幣購買力の變動(換言すれば物價平準の變動)の一大原因は米價の變動に存するなり。されど此原因たるや重大なるものなりと雖も、貨幣購買力變動の唯一の原因に非ず。従つて假りに、米價を常に一石十五圓に維

持することを得たりとするも、若し或る期間に於て貨幣購買力が一割減少せば(即ち物價平準一割騰貴せば)米穀の供給者は多少の損失を蒙むる可く又之に反して、貨幣購買力一割増加せば(即ち物價平準一割下落せば)米穀供給者は多少不期の利得を收む可し。米穀需用者に對する影響は勿論是れと正反對なり。

されば、單に米價の調節と云ふと雖も、其性質に二種あるを看過す可からず。一は物價平準の不動變動の如何に關せず、米價をして一定の水準を保たむることにして、他は米價をして物價平準と並行せしむること即ち是れなり。米價をして物價平準と並行せしむるとは、物價平準に變動なき場合に米價が一割騰貴せりとせば、何等かの方法に依りて從前の市價に復せしめ、又物價平準が一割騰貴せるに米價のみ二割騰貴せば、米價のみを約一割下落せしめ、又更に物價平準が一割下落せるにも拘はらず米價は却つ

て、一割騰貴せりとせば、米價のみを約二割方下落せしめて一般物價との平衡を恢復せしむることを云ふなり。(註)

〔註〕物價平準が一割騰貴し米價が二割騰貴せし場合に米價を同じく一割下落せしむるは物價平準との平衡を正確に恢復せしむるの所以に非ず。如何となれば、物價平準が一割騰貴せし一原因は米價が二割騰貴せしが故なるを以て、米價一割下落せしむれば、物價平準も亦多少下落す可きに依り、是れ丈にては正確に兩者間の平衡を期することを得ず。今此理を闡明せんが爲めに左に一假例を設く可し。假りに我國に左の十種の貨物ありて、或る期間内に於て各貨物の價格が左表の如くに變動せりと定めよ。(計算を單純ならしむる爲め茲には Simple arithmetical average を用ひ。讀者之を諒せよ。)

貨物	大正四年 市價	大正五年 市價
米	一〇〇	一二〇
味噌	一〇〇	一〇〇
醬油	一〇〇	一一〇
紙	一〇〇	一〇五

石炭	一〇〇	一〇三
材木	一〇〇	一一五
綿布	一〇〇	一一八
絹布	一〇〇	一一三
魚類	一〇〇	一一五
鹽	一〇〇	一二〇
木炭	一〇〇	一〇五
皮類	一〇〇	一〇四
羅沙	一〇〇	一〇二
平均	一〇〇	一一〇

若し此際米價を人為的に一一〇とせば、平均は一〇九、二三となる可し。然らば、如何にして、米價騰貴の率と一般物價平準騰貴の率とを同一たらしむるを得るか曰く、米穀以外の貨物の騰貴率を算出し、米價騰貴率を此率と一致せしむ可し。前表に依れば、此率は一〇九、六八に當る。されば、米價が一割騰貴せりとせば、此割合を九、六六分に減少せしむれば、兩者の平衡を恢復せしむることを得可し。

米價騰落の率をば物價平準騰落の率と一致せしむるは單に米價を一定せしむるよりは繁瑣な

る手数を要するは勿論なりと雖も、米價調節の根本目的を達する上に於て前者が遙かに後者に勝れるは喋々するの要なき所なり。

二 次に米價の調節に就きて吾人の注意を要する點は調節の時期の問題なりとす。即ち年に幾回調節を試みる可きかの問題なり。年一回の調節は餘りに緩慢なる可ければ、一年少くとも四回、若しくは六回、又は毎月一回の調節を必要とすることある可し。時としては一ヶ月中に於て數回調節を行ふを便とすることもある可し。勿論理想的調節は間斷なき調節に在りと雖も、こは實行上餘りに複雑なる手数を要す可きを以て、月一回又は二回の調節は或るは事宜に適ひたるものなる可きか。

三 更に米價調節を實行するに當りて重大なる先決問題となるは米價の標準なりとす。官邊に於ては一石十五圓を以て正當なる標準價格として看做せるが如くなるも、果して十五圓を以

て調節の標準とするを可とするや疑はし。此所謂正當價格なるものは生産費を根據として横井博士の算出せるものなれど、米の生産費は産地に依り、農夫の手腕の如何に依り、又年に依りて異なるものなれば、斯かる變動常なきものは標準として用ゆる價值少なし。然らば如何なる標準を採る可きか。惟ふに比較的適當なる標準と看做す可き基礎價格の算出法は單に一二にして止まらざる可けれども、吾人が其一方法として試みに茲に提案せんと欲するは、過去十ヶ年間に於ける米價の平均即ち是れなりとす。實際の米價は假令米穀の需用者並に供給者に對して或は利得を齎し或は不慮の損失を蒙したるものにもせよ、少くとも十ヶ年間需用者供給者共に經驗せる實價にして、其一騰一落に對して相互に種々手段を講じ來りたるものなるを以て、其十ヶ年間の平均を求めて之を米價調節の基礎價格と爲すは比較的公平なる手段なりと信ず。此

手段たるや、土地收用、租稅徵收、其他必要の場合に用ゆる評價方法と略同一のものなりとす。唯普通過去五ヶ年又は夫れ以下の年數を用ゆるの常なるも、米價調節は重大なる問題なるを以て、茲には假りに十ヶ年を採ることとせり。左に掲ぐるは第三十次農商統計表(百八十二頁)に載せたる米價表なりとす。(大正三年は調節問題の起りたる年なるを以て明治三十七年より大正三年迄の數字を左に用ゆたり。但し大正三年の數字を加へ、明治三十七年の數字を除くも結果には大差なし。)

市價	明治	大正	平均
圓			
12.89	37	1	15.495
12.66	38	2	
14.44	39		
16.02	40		
15.24	41		
12.54	42		
12.93	43		
16.85	44		
20.37		1	
21.01		2	

前表に依りて之を觀るに明治三十七年乃至大正二年の十ヶ年間に於ける米價の平均は十五圓

四十九錢五厘なり。假りに吾人は之を十五圓五十錢を看做し、此價格を基礎價格と爲して、今後物價平準變動と並行せしむれば、或は公平を期することを得んか。

四 以上は米價調節を以て可能なるものと看做し、且つ之を實行するものと前提して、論議せるものなるが、吾人は今や進んで此二個の根本問題を討究せざる可からず。即ち(一)米價は任意に調節することを得るものなるや(二)假りに調節し得るものなりとするも、之を實行するの可否如何の問題を研究せざる可からず。以下項を更めて此二個の問題を細論す可し。

三 米價は任意に調節し得るや

米價は任意に之を調節し得ざるものなりとは吾人が屢々經濟學者より聽く所なり。曰く、米價は自然的なる米の需用供給に依りて定まるものにして、人爲的に之を調節せんとするは經濟學の原則を無視せる無謀無用の企圖たるに過ぎ

すと。勿論、學者の所説の如く、米價が米穀の有効的需用額 (effective demand) 及び有効的供給額 (effective supply) との關係に依りて定まるは猶ほ絹布、茶、石炭、其他總ての貨物の市價が各其貨物の有効的需用額と有効的供給額との關係に依りて定まるに異ならずして、此有効的需用額と供給額には何等の變更を來たさしめずして、米價のみを任意吊上げ又は引下げんと努むるは木に縁りて魚を求めんと試むるの愚と擇ぶ所なきなり。

然りと雖も、余の信ずる所に據れば、若し方法にして宜しきを得ば、米價は任意に之を調節し得るものなりとす。然らば有効的な方法とは如何。曰く米穀の需用供給を調節するに在り。假令如何なる方法たりとも、米穀の需用供給高を左右するものに非ざれば、米價の任意的調節に對して何等の効果を齎らすことを得ざる可し。

論者或は大隈内閣の試みし米價調策の失敗を指摘して米價は人爲的に之を調節するの絶體に不可能なる極説するならん。されど、吾人は大隈内閣の調節策の失敗に歸せしは總ての調節策の無効なることを證明するものに非ずして、單に大隈内閣策が無効なりしことを證明するに過ぎざるものなることを記憶せざる可からず。而かも大隈内閣策は一拙劣なる、否な有害無益なる調節策たりしなれど、其失敗に歸せし原因は其方策が根本的に誤れるものなりしが故に非ずして、其政策の實行に用ゐし資金が餘りに少額なりしが故なりとす。世人の知れるが如く、米價調節の爲めに最初大隈内閣が支出せし金額は四百餘萬圓に過ぎずして、其資金の決算として豫算委員會に提出せし報告書は左の如し。

一、大正三年度買入資金三百萬圓

内 譯

買入高(買入石數十八萬七千四百八十八石(平均一石

の買入價格十四圓二十一錢九厘)二百六十六萬七千七百九十七圓九十錢

大正四年四月までの保管料其他雜費五萬六千二百三十三圓八十一錢

差引二十七萬五千九百六十八圓二十九錢

二、大正四年度買入資金二百萬圓

内 譯

買入高(買入石數十一萬四千六百七十五石平均一石の買入價格十三圓三十錢三厘)百五十二萬五千六百三十三圓四十五錢

大正四年四月迄の保管料其他雜費二萬七千二百五十三圓四十六錢

差引四十四萬七千一百三十三圓九錢

備考 本表は未清算に付き清算の上は多少の異動あるを免れず

前表を綜括すれば左の如し。

買入石數 三十萬二千六百六十三石

買入價額 四百十九萬三千四百三十一圓

三十五錢

一石價格 十三圓八十七錢

即ち大隈内閣が米價を引上げる爲めに商人をして買収せしめし石數は僅かに三十萬二千六百六十三石に過ぎず。此買収額は米穀の需用額を夫れ丈け増加せしめたりとも、將た又其供給を夫れ丈け減少せしめしものなりと看做すとも、結果は同一なるが、斯くの如き需用供給の關係上に於ける一小變動が單に微細の影響を米價に與へたるに過ぎざることは毫も怪むに足らざるなり。大正三年度に於ける米穀收穫高は實に五千七百萬七千五百四十四石なるを以て、此供給額に對する大隈内閣の人爲的需用増加額の率は僅々一萬分の五十三に過ぎず。換言すれば、一パーセントの二分の一強に過ぎず。

勿論農家は各其收穫高の一部を自家用に供するの常なるを以て、市場に提供せらるゝは全國米穀收穫高の全部に非ずして、其一部分なり。今假りに收穫高の三分の二が市場に提供せらるゝものなりとせば、之に對する政府買上高の割

合は千分の入なり。換言すれば、一パーセントの十分の入なりとす。更に假りに、市場に提供せらるゝ割合が五十パーセントに過ぎずとするも、供給額に對する政府買収額の比率は尙一萬分の百六、即ち一パーセント強に過ぎざるなり。

加之、吾人は大正三年度の收穫は未曾有の額に達し、前年度に比して、一割以上の増收ありしことを看過す可からず。即ち大正二年度の收穫高は五千〇二十二萬五千二百六十七石なりしに、大正三年度の收穫は五千七百萬七千五百四十四石なるを以て、大正二年度に對する昨年度の増收は六百七十八萬二千七百八十七石に上れるなり。此六百七十八萬石の増收額こそ昨年より本年に掛けての米價暴落の最大原因なれ。されば、米價を昨年上半年期の十六七圓臺に引下げんとせば、少くとも四五百萬石の買入を爲す可かりし

内地に於ける米の消費額

に、大隈内閣の買収せし石高は僅か三十萬石にして其十分の一だにも達せざるなり。
吾人は爰に至りて、米穀の需用額に對する供給額の關係が幾何の影響を米價に及ぼすものなるかを一層精密に知る所なかる可からず。此關係を闡明する爲めに左の順序に従ひて討究す可し。

- 一、一人當り需用額を求む
- 二、毎年の一人當り收穫高を求む
- 三、此兩者の差と其翌年度に於ける米價騰落の程度との關係を求む。(註)

〔註〕米價、米穀の收穫、全需用額、人口。延びては一人當り收穫高並に需用額の統計は頗る不正確なるを以て以下吾人の論述する所、從つて吾人の結論は決して正確なるものに非ずして、單に大體の傾向を示すに止まるのみ

一、米穀の全需用額並に一人當り需用額

年次	前年内地生産額	輸移出入差引 輸入超過額	消費總額	人口	對一人 消費額
明治二十一	三九、九九九、一九九	(一)一、三八六、六五六	三八、六一二、五四三	三九、六〇七、二三四	〇、九七五
同 二十二	三八、六四五、五八三	(一)一、三五四、三六八	三七、二九一、二一五	四〇、〇七二、〇二〇	〇、九三一
同 二十三	三三、〇〇七、五六六	一、六七四、八九九	三四、六八二、四六五	四〇、四五三、四六一	〇、八五七
同 二十四	四三、〇三七、八〇九	(一)一、六七、九五二	四二、八六九、八五七	四〇、七一八、六七七	一、〇五三
同 二十五	三八、一二三、五四八	(一)一、八一、四〇七	三七、九四二、一四一	四一、〇八九、九四〇	〇、九二三
以上五ヶ年平均	三八、五六二、七四一	(一)二、八三、〇九七	三八、二七九、六四四	四〇、三八八、二六六	〇、九四八
明治二十六	四一、三七八、四七四	(一)一、一〇、七一二	四一、二六七、七六二	四二、三七七、六一五	〇、九八八
同 二十七	三七、一九九、六六三	七一八、九四八	三七、九一八、六一〇	四一、六九四、四二四	〇、九〇九
同 二十八	四一、八一五、七一四	(一)八一、八五四	四一、七三三、八六〇	四二、二二五、〇八〇	〇、九八八
同 二十九	三九、九二〇、八八二	(一)五四、七七七	三九、八六六、一〇五	四二、六六九、四六九	〇、九三四
同 三十	三六、一九九、七七一	(一)九八一、六五二	三八、一八一、四二三	四三、一八一、〇四八	〇、八八四
以上五ヶ年平均	三九、三〇二、九〇一	四九〇、六五一	三九、七九三、五五二	四二、二二九、五二七	〇、九四三
明治三十一	三八、九三二、八二一	一〇三、七七七	三八、〇三六、五九八	四一、三〇八、八九七	〇、九四六
同 三十二	三三、〇三九、二九三	四、三六〇、八七〇	三七、四〇〇、一六三	四三、七一四、一四二	〇、八五六
同 三十三	四七、三八七、六六六	(一)二、四八、八六二	四七、一三八、八〇四	四四、二〇五、八七三	一、〇六六
同 三十四	三九、六九八、二五八	六五五、七〇四	四〇、三三三、九六二	四四、七一〇、〇七三	〇、九〇三
同 三十五	四一、四六六、四二二	七六〇、一一五	四二、二二六、五三七	四五、二二七、四六四	〇、九三四
以上五ヶ年平均	四一、七〇一、二二五	一、三八四、七二六	四三、〇八五、九四一	四四、七二三、二七五	〇、九六三
明治三十六	三六、九三二、二六六	四、九六〇、三九六	四一、八九二、六六二	四六、五八八、〇〇〇	〇、九〇〇

同	三十七	四六、四七三、二九八	五、九五八、四一六	五二、四三一、七一四	四七、一九七、六〇〇	一、一一一
同	三十八	五一、四三〇、二二二	五、〇四五、七九六	五六、四七六、〇一七	四七、八一九、三〇〇	一、一八一
同	三十九	三八、一七二、五六〇	三、〇一三、三四八	四一、一八五、九〇八	四八、四五一、一〇〇	〇、八五〇
同	四十	四六、三〇二、五三〇	三、〇五二、八七六	四九、三五五、四〇六	四九、〇九二、〇〇〇	一、〇〇五
以上五ヶ年平均		四三、八六二、一七五	四、四〇六、一六六	四八、二六八、三四一	四七、八二九、六〇〇	一、〇〇九
以上十ヶ年平均		四二、七八一、六九五	二、八九五、四四六	四五、六七七、一四一	四六、二七六、四三八	〇、九八六
明治四十一年		四九、〇五二、〇六五	二、八〇一、六八一	五一、八五三、七四六	四九、三一八、三〇〇	一、〇五一
同	四十二	五一、九三三、八九三	一、九六二、七一八	五三、八九六、六一一	四九、九〇三、七〇〇	一、〇八〇
同	四十三	五二、四三七、六六二	一、四四一、一八〇	五三、八七八、八四二	五〇、五〇四、〇〇〇	一、〇六七
同	四十四	四六、六三三、三七六	二、二五〇、〇八九	四八、八八三、四六五	五一、一一九、二〇〇	〇、九五六
自四〇年平均		四九、二七一、九〇五	二、三〇一、七〇九	五一、五七三、六一四	四九、九八七、四四〇	一、〇三二
自四五年平均		四五、九九九、八八七	一、七〇八、四六五	四七、七〇八、三五二	四七、八二九、〇五三	〇、九九七
自三二至四四年平均						

備考

本表は清水吉松氏著『米穀搜機論』に據る。輸移出入差引中(一)は輸移出超過を示し、他は輸移入超過なり。

前表の示す所に據れば、本邦に於ける一人當り米穀消費高は過去二十四年間に於て漸次増加するの趨勢を示せるが、此二十四年間に於ける平均一人當り一ヶ年の消費高は九斗九升に當れり。

二、一人當り收穫高

毎年度の收穫高を人口を以て除したる一人當

年次	一人當り收穫高	年次	一人當り收穫高
明治三十八	九四六	明治三十二	八九八
明治三十九	八四九	明治三十三	九二七
明治四十	七六五	明治三十四	一〇三七
明治三十一	一〇八四	明治三十五	八〇七

るものなるが、統計不備の爲め、米價に關しては、農商務統計表より明治三十三年度以後の數字を採らんと欲す。

明治三十六	九九八	明治四十二	一〇五一
明治三十七	一〇九〇	明治四十三	九二三
明治三十八	七九八	明治四十四	一〇一二
明治三十九	九五六	大正元年	九七〇
明治四十	九九九	大正二年	九五九
明治四十一	一〇五三		

前表に就きて之を觀るに、明治二十八年より大正二年に至る十九ヶ年間に於て一人當りの收穫高が甚だしく變動せるを知るなり。最も多きは明治三十七年の一石九升にして、最も少きは明治三十一年度に於ける七斗六升五合にして、此兩者の差三割内外に達せり。此甚だしき變動が米價騰落の一大原因なるは茲に喋々するを要せず。

三、一人當り需用額に對する割合と其翌年度

に於ける米價騰落の程度との關係

以上、一人當り需用額並に收穫高に就きて多少の數字を得たるを以て、吾人は是れより兩者の比例と米價の變動との關係を略述せんと欲す

前表に示す如く、明治三十三年乃至大正二年間に於て、米價は最低の十一圓三十二錢より最高二十一圓〇一錢迄の間を昇降せり。其變動は十四年間に九割に達し、一ヶ年間の騰落も亦二三割に上れること稀なりとせず、然りと雖も、米價の騰貴せると同時に、一般物價も亦騰貴せり。勿論米穀は我國に於ては他の貨物と異なれる特種の地位を占むるものにして、米價騰貴せ

りとして、一般物價必ずしも騰貴せず、又米價下落せりとして、一般物價は必ずしも同時に下落せず。されど一般物價騰貴せば、米價は幾分か必ず騰貴するの傾向を有す可く、又一般物價下落せば米價も亦必ず幾分か下落するの傾向を有す可し。されば、米價が米穀の需用供給の關係に依りて幾何の騰落を來たせしやを知るには、米價の騰落率より一般物價の騰落率を減算せざる可からず。因是、左に六十三品の價格を基礎として計出せる農商務編纂の物價指數を標準として、眞の米價を計出せんと欲す。

年次	米價	物價指數	訂正米價
明治三十三	一一、三二	一〇〇	一一、三二
明治三十四	一一、四七	九七	一一、八二
明治三十五	一二、〇七	九七	一二、四四
明治三十六	一三、六八	一〇〇	一三、六八
明治三十七	一二、八九	一〇八	一一、九三
明治三十八	一二、六六	一一六	一〇、九一
明治三十九	一四、四四	一二四	一二、六六

明治四十	一六、〇二	一二二	一三、一三
明治四十一	一五、二四	一二二	一二、五〇
明治四十二	一二、五四	一一八	一〇、六三
明治四十三	一二、九二	一二〇	一〇、七八
明治四十四	一六、八五	一二六	一三、三七
大正元	二〇、三七	一三三	一五、三二
大正二	二一、〇一	一三五	一五、五六

備考 物價指數は三十三年の物價を百とす。

右表を観るに、明治三十三年乃至大正二年の十四ヶ年間に於ける最低訂正市價は十圓六十三錢にして、最高は十五圓五十六錢なり。即ち最低最高の差は五割以下なり。之を以て訂正を加へざる市價と對照するに、變動の差甚だ著しきを觀る。要するに、米價は世人の想像せるが如くに激變するものに非ざるが、偶々米價の騰貴が物價標準の騰貴を伴ひたるが爲めに、一見甚だしく昂昇せるが如き觀を呈せるに過ぎず。

以上吾人は米穀需給の關係と米價とを比較するに必要な基礎數字を得たるを以て、是れよ

り進んで其比較に遷らんと欲す。而して其比較に用ゆる方法は

- 一、各年に於ける一人當り收穫高と平均一人當消費額とを比較して、其翌年に於ける米穀供給の過不足の分量を計算し
 - 二、次に各年の訂正米價と其前年度の訂正米價を比較して騰落の數字を求め
 - 三、而して、(一)と(二)との間に存する數量的關係を求むるに在り。
- 左表は即ち其計算の結果なり。

年次	一人當り供給の過不足	前年に對する騰落
明治三十四	△ 六三合	〇 五〇錢
明治三十五	△ 四七	〇 六二
明治三十六	△ 一八三	〇 一、四四
明治三十七	△ 八	一、七五
明治三十八	△ 一〇〇	一、〇二
明治三十九	△ 一九二	〇 一、七五
明治四十	△ 三四	〇 四七
明治四十一	九	六三

明治四十二	六三	一、八七
明治四十三	六一	〇 一五
明治四十四	△ 六七	〇 二、五九
大正元	二二	〇 一、九五
大正二	△ 二〇	〇 三四

備考 △は不足、〇は騰貴を示し、他は過剰又は下落を示す。

此米穀過不足の計算には輸移入米を度外視せり。輸移入は米價の騰貴せるが爲めに行はるゝものなれば、之を度外視する可とす。此表に計上せるは收穫高のみ

米穀の供給過剰ならば、米價は下落す可く、不足ならば、騰貴す可きなり。今、右表に就きて之を観るに、米穀の供給過剰なりし年に於て米價の下落せる例四、騰貴せる例三にして、米穀の供給不足なりし年に於て米價の騰貴せし例六なるが下落せし例なし。即ち十三ヶ年間に於て、十ヶ年は米價は生産の過不足に従ひて騰落し、他の三ヶ年に於ては此原則に従はざりしを觀る。即ち十三回の内十回の一致は其率頗る高しと云はざる可からず。他の三回の一致せざり

し一原因は統計の不完全なることに存し、他の原因は米穀の輸入移出の關係に存するものなる可し。されど、兎に角、米價騰落の最大原因が内地に於ける米穀の産出額に存するは前表の明

年次	一人當消費高	人口	全需用額	前々年度生産額並輸入超過額	前年度生産額	前年度需用額	差當年供給額
明治三十四	九三	四、五二三	四、二〇六	四、〇四七	四、一四七	四、一三三	四、〇八一
同 三十五	九四	四、五七六	四、三八四	四、二二六	四、六九一	四、三〇六	四、七二一
同 三十六	九五	四、六五六	四、四二三	四、八四二	三、六九三	四、二八四	四、二五一
同 三十七	九六	四、七二〇	四、五三一	四、二一八	四、六四七	四、四二三	四、四四三
同 三十八	九七	四、七八二	四、六三九	五、二九四	五、一四三	四、五三一	五、九〇六
同 三十九	九八	四、八四五	四、七四八	五、六七二	三、八一七	四、六三九	四、八五〇
同 四十	九九	四、九〇九	四、八六〇	四、一三一	四、六三〇	四、七四八	四、〇一三
同 四十一	一、〇〇	四、九三二	四、九三二	四、九五二	四、九〇五	四、八六〇	四、九九七
同 四十二	一、〇一	四、九九〇	五、〇四〇	五、一九七	五、一九三	四、九三二	五、四五八
同 四十三	一、〇二	五、〇五〇	五、一五一	五、三九八	五、二四四	五、〇四〇	五、六〇二
同 四十四	一、〇三	五、一一二	五、二六五	五、三九三	四、六六三	五、一五一	四、九〇五
大正元	一、〇四	五、一七五	五、三八二	四、九〇九	五、一七一	五、二六五	四、八一五
同 二	一、〇五	五、二四〇	五、五一二	五、四七四	五、〇二二	五、三八二	五、一一四

一、一人當消費高は左の方法に依りて算出せり。
明治三〇年―三四年の五ヶ年間の平均消費額は九斗二升九合(四拾五入して九斗三升)にして明治四二年―大正二年の五ヶ年間の平均一人當消費額は一石四升四合なるを以て平均一ヶ年一升の増加に當れり。由りて、明治三十四年の消費高を九斗三升とし、毎年之に一升を加へたり(平均一人當消費額は前掲の数字に據る)。
二、人口は乙種現住人口數に依る。萬以下四拾五入。
三、全需用額は一人當消費額に人口を乗じたるもの。
四、前々年度生産額亦前年度輸入超過額は銀行通信録に第五十九卷第三百五十五號(七五頁)に據る。
五、前年度生産額は農商務統計表に據る。
六、大数は總て萬以下四拾五入。

前表は明治三十四年乃至大正二年の十三ヶ年間に於ける各年の米の需用額と供給額とを示すものなりとす。普通當年の供給額中には前年度の生産額と當年の輸入超過額を計上すれども、是れ丈けにては正確を期すること能はざるを以て、前表には前々年度よりの生産額並に輸入超過額を計上せり。但し、當該年度の輸入

超過額は之を除外せり。如何となれば、輸入超過は内地の米價に代りて誘致せらるゝものなるが吾人の知らんと欲する所は、其輸入超過を來たしたる米價の高低と前年度より持越したる米穀現在量との關係に外ならざるを以て也。次表は前表を基礎として計算せる需用額に對する供給額の過不足の程度と米價の關係なりとす。

年次	需用額に對する供給額の過不足	前年度に對する米價の騰落	百萬石の騰落
明治三十四	△ 一二五	〇 五〇	四〇
同 三十五	△ 四三七	〇 六二	八三
同 三十六	△ 一七二	〇 一四四	八三
同 三十七	△ 八八	一、七五	八
同 三十八	一、二六七	一、〇二	八
同 三十九	一〇二	〇 一七五	六
同 四十	△ 八四七	〇 四七	六
同 四十一	六五	六三	九六
同 四十二	四一八	一、八七	四四

同	四十三	四五	一五	
同	四十四	三六〇	〇二、五九	七〇
大	正元	△五六七	〇一、九五	三四
同	二	△三九八	〇三四	九
平	均			四二

備考 △は不足を示し、他は超過なり。○は騰貴を示し、他は下落を示す。

右表に就きて之を觀るに、需用に比して供給の不足せる年度に米價の騰貴せること六回、却つて下落せること一回にして、需用に比して供給の剩れる年度に於て米價の下落せること三回却つて騰貴せること三回なりとす。即ち需用供給の法則に従ひて米價の騰貴せること十三ヶ年中九年度にして、兩者の一致せざる年度の數は四なり。

此等不一致を示せる年度を省き、他の一致を示す九ヶ年度のみに就きて之を觀るに、需用對供給の差額に依りて誘致せらるゝ米價騰落の程度は年に依りて大に異れり。然かも孰れの年度に於ても其差百萬石に付騰落の程度が一圓に上

れることなきは吾人の注目し値ひする所ならんか。而して其騰落の平均は百萬石に付四十二錢なり。即ち、百萬石の供給増加は平均四十二錢の下落を醸し、百萬石の供給減少は平均四十三錢の騰貴を誘致するものなりとす。

前表は多く推算に因づく數字を基礎として計出せるものあるを以て、決して正確なる結果を示すものなりと云ふことを得ざれども、大體の傾向を示すに足るものなりと信ず。若し果して然らば、米價を一圓方引上げんとせば、供給を約二百萬石減せしむるか、或は需用を約百萬石増加せしめざる可からず。大隈内閣が米價を吊り上んとして僅々三十萬石を買上げたるも、殆んど何等の影響を市價に及ぼすこと能はざりしは毫も怪むに足らざる也。

要するに、米價は米穀の需用供給の關係に依りて定まるものにして、直接人為的に左右することを得ざれども、米穀の需用供給の人為的調節に依りて米價を左右することを得るものなりとす。此人爲的調節の方法に就きては節を更へて略述せんと欲す。

(未完)

批評と紹介

大藏省理財局編纂『金融事項參考書』

(外國之部)

本書は太陽版四卷より成る尨大なる刊行物にして、載する所は重要諸外國に於ける經濟統計なりとす。其中第一卷は大正三年十一月の刊行に係り、紙數九百十四頁にして、載する所は英、佛、獨、露、奧、羅、匈、貨幣同盟、和、米、其他諸外國の貨幣制度並に貨幣鑄造高なり。第二卷は第一卷發行の前月。即ち大正三年十月の刊行に係り、頁數約千二百に上り、同上諸外國の紙幣發行銀行の營業狀況、就中紙幣發行高に關する綿密なる統計を掲ぐ。第三卷は大正四年三月に印刷上梓せられたるものにして、頁數第二卷と伯仲す。載する所は金利の統計、紙幣發行權を有せざる普通銀行の營業狀況、郵便並に貯蓄銀行の貯金高及び手形交換高なりとす。第四卷は未だ印刷中なるが、財政、生産、交通、商事、國勢に關する統計を掲ぐる豫定なりと云ふ。

以上の統計は悉く大正三年七月迄の調査にして、此調査を主管せるは大藏省理財局國庫課勤務大藏省屬法學士淺田嘉一

氏にして、氏は調査の正確を期する爲めに出来る限り根本資料を用ひたりと。

本書に載する統計の計算は過去に於ける大藏省の刊行物より推斷して正確ならんと思はる。されど、太陽版三千頁を充たす無數の數字中には多少の誤算誤植は免かれざる所なる可し。吾人は到底斯かる浩瀚なる統計書の全部に亘りて驗算するの餘暇を有せざるのみならず、概して其の正確なることを信するものなるが、唯第三卷七頁に載する『八九五一一九一四年間倫敦外七都市公定歩合月別表』に就きて試みに算盤を弾きたる所に依れば、伯林金利平均三、二四とあるは三、一二五なるが如く思はる。又瑞西の平均四、一三五なるは四、一三と載せるは端數を打捨てたる爲めならんも、若し四捨五入なれば、四、一四とある可きか。同頁上に於ける外の計算は悉く正確なるが如し。唯都市の中に瑞西を擧げたるは如何なる故なるや。

尨大なる刊行物のことなれば、多少の瑕玼は免がる可からざる所ならんも、全體より觀れば、本書は外國經濟事情の比較研究に資する所尠からざる頗る有益なる編纂物なり。吾人は理財局並に淺田氏の勞を謝すると、同時に此種の公刊物が續々發行せらるゝことを希望して已まざるものなり。